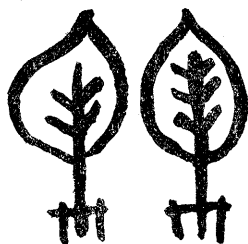


# 一年保育と二年保育の功罪



菊池ふじの

一年保育について何か書くようにと編集部からお話がありました。

一年保育というのは昔からありました。或は昔は、むしろ一年保育というのが多かったのかも知れません。現在でも、地方にいけば、この一年保育が多いようです。

戦後、世の中が落ちつくにつれて、幼児教育もまた盛んになり、入園希望者が急に増してきました。しかし、その割には幼稚園が増設されないで、一時奇妙な現象を呈しました。つまり入園者を決めるのに各幼稚園は困難をしたのでした。或る園では志願順にということになる、志願者は受付前日から泊り込みをはじめるといったことがあります。また或る園では、抽せんによってというふうにする、区の税金で経営するのに区の者を入れないという法はない、と文句が出る始末です。この苦情に因應するために、希望者の全部を收容して幼稚園教育を行うために、二部制を試みている園もあります。また或る園では、検定を行って入園者をきめる、という方法を採っているところもあります。ここにもまた、これに附随して問題が出ています。

このような事態に、文部省としても、何等

かの手を打たなければならなくなったのでしよう。たしか昭和二十三年か四年頃『入園を希望するものうちで、一年保育の者を優先的に考慮するように』との通牒が全国の幼稚園あてに出されました。これは、漸く勃興しかけた幼児教育の恩恵を、できるだけあまねく多くの幼児にゆきわたらせよう、との意図から発せられたものと解釈されます。

そこで現在は、公立の幼稚園の場合は、この通牒に基づいて、一年保育を優先的に入園させ、収容力に余裕のある場合に二年保育を、更に三年保育児を入園させているようです。私立の幼稚園の場合は必ずしもそうではなく、従前どおりの主義主張に基づいて二年保育のみを入園させているところも数園あるように聞いています。

編集部では、この度、昔からあるこの一年保育、現在の公立幼稚園にも私立幼稚園にも、更に保育園などにも、かなりの数を收容している一年保育児についての問題を粗上りのせ、これについていろいろの角度から、そしていろいろの経営者に、問題や意見を開陳してもらって、未だかつて取り上げられなかったこの問題について、本誌上にクローズア

アップさせようとの試みで、先ずその皮切りを私に命ぜられたのであります。

しかし、私の職を奉じている当附属幼稚園では、現在では、一年保育を取り扱っていませんので、ご命令は受けましたものの、私にはこの問題に関しての経験が極めて貧弱で、執筆する資格がありませんので、お断りいたしましたのですが、何か書くようにとのたつてのお話なので、止むなく私の貧弱な経験を申し述べてこの責をふさがせていただくことにいたしました。

行動や能力の面に於て、私の貧弱な経験とは、その昔、私がここの幼稚園に、はじめて就職した大正の終り頃から、昭和の初めにかけて、年長組に数人の男児の欠員が生じるのが常でありました。家庭の事情とか、父親の転任などのために、女兒にも一各ぐらいの欠員が生じたこともありましたが、女兒の場合には補欠をせずに、そのままにしておりました。この場合に、年長組を、即ち五才児を数人、希望者の中から試験を行って入園をさせ、前から在園している組の中にいれたいしょに保育し、卒業させたことがあります。

私も一、二回、この補欠児の交った組を受

けもったことがあります。

大勢の希望者の中から試験に合格して入園するのですから、はいった幼児は、何といつても素質がよいのです。二十五、六人の中に三、四人交つて、しかもその二十五、六人は一年も前から入園しているので、幼稚園には馴れ親しんでいて、我が家の如くに振舞っている連中なのです。この連中の中に途中からはいつて、はじめは、おどおど、きよるきよるして、不安定そのものであります。暫くすると、幼稚園にも馴れ、友達や先生にも親しんできて、二学期、三学期と進むうちには、先人たちと違わないように、なるのでした。

けれども、よくよく細かに、補欠ではいつた子どもたちについて考えてみますのに、若しこの子どもたちが、もう一年前から幼稚園にはいつていたらと思うことが、いたるところで感じられるのでした。

描いた絵を見ても、若しこの人たちが二年保育ではいつていたのだつたら、このあたりがもう一段とのびのびと、しかもおもしろい構想をもつて描かれたであらうと眺めいつたことが屢々ありました。

友達との会話、人の前での発表など、言語による表現活動に於ても、絵に於ての場合と同じように、もう一足伸び足りないと思われることがありました。

自由あそびの活動状態に於ても、丁度絵や会話に於ての割合で、いろいろのものをいこなしたりする能力、また、ものを工夫したり、友達との間の結びつきなどに物足りなさを感じられるのでした。

これはつまり、先きにはいつている多勢の中に、三、四人の少数が、一年もおくれてはいつてきたのですから、すべての面に少なからぬ劣等感や不安定感があるのは当然のことでしょう。それが、子どもの生活のすべてに於て、伸びきれない、物足りない、という現象となつてあらわれたのであるとしか解釈できません。この当時、この子どもたちを小学校へ送り出して思ったことは、

「二年保育でなくては、伸びる芽が伸びきれない。やっぱり、幼稚園は二年保育の方が、子どもたちにとつても、また受持つ先生の身にとつても、面白く、張りあいがある」と述懐するのが常でした。

この場合、この一年保育は、先きにはいつ

ている、しかも多勢の先輩がいるための劣等感とか、不安定感などが大きく作られて、なお伸び足りなかったらみがあったのだと思います。

次の私の経験は、戦争直後、幼稚園再開のときの経験です。

このときは、幼稚園は再開され、幼児を募集しても、疎開の人がまだ戻っていないときでしたので、募集人員に満たないという実情でした。ですから、二年保育一色では定員に満たないので、一年保育と二年保育との両方を一時に募集したわけでした。このときは定員を云々する程でしたから、無論精神検査などは行わず、ただ伝染病を持っていないかどうかを調べる程度で、ごく簡単な身体検査のみを行って入園者を決めたのでしたから、いわゆる無選択幼児というわけでした。このときの一年保育を受け持った経験が、私の第二の経験なのです。

このときは、一組が全部一年保育の五才児でした。二年保育、四才児の新入を受けもったときの経験にくらべて、体力、知力両面の発育に格段の相違が認められるのです。

入園当初から卒業までの行動や能力の変遷

を省みますときに、四才児に於て見られた、もろもろの変遷は、やはり、この五才児に於ても見られます。もろもろの変遷とは、入園当初の不安定感、次いで園や先生友達との親近感、つづいてその馴れから、今迄の遠慮がとれて、自己統制のまだ現れない無軌道な行動。やがて夏休み。そして九月第二学期には、第一学期の変遷を以前よりも短期間で繰りかえし、そうこうしているうちに秋の運動会や遠足もすんで十一月ともなれば、新入らしい面影も段々と薄らいで、おちつきを見せるようになり、友達との協和とか、園や施設や用具、材料などに対してもすっかり安定感をもち、漸くその個人本来の面目をあらわしてくるようになるのが、大体のコースだと思います。そして第三学期には、これが一層確実さと深さを増して、四才児は年長組に、五才児は幼稚園を終えて小学校に進学するのです。

このうつりかわりは四才児も五才児も一応は同じように辿りますが、四才児は五才児に比べて、何といっても淡く弱い、ということが事実だと思えます。

このようにして、一年保育の子どもたちも

同じようなうつりかわりの過程を辿って、私たち幼稚園の教師から見れば、一応、堂々と立派になって小学校へ進むのですが、それでも、二年保育の子どもたちに比べますと、何となしにみのりきらない、という感じが、どこかに残っているのを感じないわけにはいきません。そこで、その原因はどこにあるのだろうかと考えてみました。

二年保育の子どもたちは、年少の一年の間に、上級生たる年長の人たちの、生活のしかたや、行動、習慣、ものの考え方、いろいろの表現の仕方といったようなものを、いつの間にか、しっかりと学びとっているのです。つくづく眺めいっているという場面もそう度度見受けられませんが、子どもは敏感ですから、見ないようでも、よく見ているのです。一つの学校の校風というものが、言わず語らずの間に、次代に伝え伝えてゆくように、幼稚園の子どもたちとはいえども、上級生の行動や生活のしかたや、表現の方法などをちゃんと見てとっているものだと思います。かくして一つの風格というものが、淡いながらも伝えられていくように私には思えるのです。

こうした内在的な温床があるところえ、加

えて、上級になったという自覚が拍車をかけて、言うに言われないいい味を二年保育児の方は持つようになるのだと考えます。

こうは言いましたものの、一年保育と二年保育とに、いつも、そしてどの子どもにも、このようにはつきりした違いがあるとは言えません。ごく一般的に、大体論として、行動や能力面に於て感じられるという程度であることを申し添えておきたいと思えます。

次に教師として、その取り扱いの点について考えてみましょう。

この時期の一年の相違は、理解力に於ても体力に於ても相当のひらきがありますので、四才児を扱うのに比べては、理解も早いし、反応もはっきりしているのでむしろ五才児の一年保育のほうが扱い易いとも言えるでしょう。しかし、体力面からいって、活潑でもあり、体のボリュームも大なので、一組四十人ぐらいですと、経験の少ない先生の場合などは、統率がしきれなくてもあますこともわかりません。これに比べて四才児の方は淡いけれども何となしにまだ乳くさい可愛いいさが残っており、先へいっての伸びかたにも大い

に期待がもてますので、受け持つ教師としては、どちらがいいということはいえないように思います。ただ一年保育のほうは、上級生よりの感化とか雰囲気とかいったようなものを受ける機会が少く、教育を受ける期間も一年間だけです。環境構成とか、指導の方法などには一層の工夫と努力が必要になってくるわけだと思えます。

次に、一年保育と二年保育とに次のような実際問題があることをきいておられます。それは、年長組ということで、一年保育の子どもにも、二年保育の子どもにも、同じ仕事を課しているのに対して、父兄側から出た苦情なのですが、一年だけの人と、二年間も幼稚園にいる人と同じことをするのならば、二年も幼稚園に行く必要はない、というのです。これは、幼稚園教育の実質を知らない皮相の考えとしては一応無理からぬ事情だと思えます。しかし、教師として、こうした言いぶんを屈服させるに足る、しっかりした根拠や意見を持ってさえいれば、こういう考えの父兄を説得することは容易でありましょう。即ち、二年間も幼稚園にいることの良さを、具体的な実例を示しながら話すのです。

例えば、毎日の生活が、殊に年長になったときの一年間というものは、殊更自信に満ちた、そして心からの安定感をもって、幼稚園を吾が家の如くに生活していること、年少の一年間は、上級生がいるために、頭の上らないような、頭がつかえているような生活にも思えるけれども、この間に年長の人たちの行動のしかたを学びとって身につけているのであることなどを、懇ろに話して、二年間幼稚園にいることの、少しも無駄でないことを理解させることは、そう困難なことではないと思えます。以上述べたように、理想としては二年保育が一番いいと私は思っておりますが、しかし、家庭の事情もあり、経済力とか又は施設の関係などもあって、二年保育一色でいけないのも現状としては止む得ないことと思えます。それよりか、文部省の意図されたように、一年保育を優先的に入園させると、かなり多くの子どもを収容することができるので、小学校の前の馴れとして、一人でも多くの幼児に、幼稚園教育の恩恵を与え得られることは、一年保育の大なる功績と言わなければなりません。以上、一年保育についての私の経験したことを申し述べて稿を終りたく思います。